

日系カナダ移民のライフヒストリーをめぐる調査法の再考

実証的な生業研究にむけて

河原典史

はじめに 日系カナダ移民をめぐる研究方法の再検討

第二次世界大戦以前のカナダへの日本人移民，いわゆる日系カナダ移民に関する研究では，当時バンクーバーにあった大陸日報社によるいくつかの報告書¹⁾や同社が発刊していた日本語新聞『大陸日報』²⁾などが利用されてきた。また，カナダ政府が調査した報告書³⁾や多くの外交文書も重要な資料として活用されてきた⁴⁾。

日系カナダ移民史研究において，このような文字資料と同様，時にはそれら以上に重要視されてきたのが，インタビュー（聞き取り調査，聞き書き）を通じて得られたオーラルデータである。日系文化のアイデンティティ研究に貢献したこの方法は評価されるものの，実証研究における一次資料としてのオーラルデータの有効性については，先行研究では必ずしも十分に検証されてこなかったように思われる。つまり，リドレス運動へと結実したものの，日系カナダ移民史研究におけるこの方法論は，検討する機会を看過したままともいえよう。とりわけ，ライフヒストリー（個人史）を描きながら生業を考察する際に，日系人の特徴をとらえる可能性を秘めながらも，積極的な検討はされてこなかったのである。

そこで，本稿では，第二次世界大戦以前の日系カナダ移民に関するオーラルデータを再検討し，ライフヒストリー法を援用しつつ，インフォーマント（調査対象者，話者）の生業について考察することを目的とする。特に，インタビューの限界と併用資料の意義について考えたい。

1. ライフヒストリーの記録媒体と実証性

ライフヒストリーを研究資料として活用する場合，研究者が直接に採集したオーラルデータだけが利用されるのではない。日系カナダ移民のライフヒストリーを描く場合，インフォーマントと記録媒体との関係や，その実証性などはほとんど検討されてこなかった。そこで，まずは記録媒体について考えることにしよう。

伝記・自伝・日記類

ライフヒストリーの記録として，いくつかの伝記，自伝や日記類が存在する。そのなかで，日系社会を細解くことが可能なものとして，山本宣治の「日記」⁵⁾がある。以下は，山本が1907年（明治40）5月14日にバンクーバーに上陸した直後の日記⁶⁾の一部である。

5月23日(木)⁷⁾

(前略)支那人の園丁の働きつつあり。ハウスウオーク悪からざれ共、多少技術の素質ある余の如き者、ガーデンに働けるならばハウスウオークの如き簿給ならず、(後略)

6月30日(日)⁸⁾

(前略)ヴィクトリアにて話せし日本風ガーデン造へるにつき北晚香坡二十一街に一エーカ半ばかりの地所あり。(中略)五十弗づつの株を募らんかと思ふと色々秘密の話をきかされたり。(後略)

8月13日(火)⁹⁾

(前略)プロヴィーンズの広告を見る。(中略) Wanted-Position as a Gardeners help of practical firm. by Japanese boy. experienced about Indoor floriculture. S.Y.P.O.Box 868 (後略)

9月23日(月)¹⁰⁾

(前略)当市屈指の富豪プロバンス氏のガーデンにて(中略)園丁長は日本人しかも鍋木牧師の知り人、(後略)

山本の日記からは、当時のイギリス系カナダ人の邸宅には庭園が設けられ、その整備に中国系移民が従事し、日系人も募集されていたことなどが判明する。しかし、この日記からは後に社会主義思想家としての山本の苦悩を読み取ることばかりに傾倒されてきた。したがって、造園家として奔走する山本の活動が1900年代初頭における日式庭園の試行、1930年代での日系ガーデンの萌芽、さらには第二次世界大戦後におけるエスニック・ビジネスとしての再編に多大な影響を与えたことが、彼の日記から看取されなかった¹¹⁾。すなわち、伝記・自伝・日記類に描かれたライフヒストリーには、研究者の視点によっては看過されていた点が新たに発見される可能性を秘めている。

人名辞典

前述した大陸日報社は、1922年に発刊した『加奈陀同胞発展大観 付録』に「在留同胞人物観」¹²⁾・「同胞婦人観」¹³⁾・「帰国せる先輩有志の事歴」¹⁴⁾・「物故せる先輩有志の倂」¹⁵⁾を収録している。748名が記載されたこれらの資料は、当時の日系カナダ移民史の貴重な資料にもなっている。そこには、1888年(明治21)に和歌山県三尾からカナダへの渡加後、フレザー川河口のスティープストーンでサケ刺網漁業に従事し、後に同郷から多くの漁民を呼び寄せた工野儀兵衛も紹介されている。彼はカナダ日系漁民の先駆者¹⁶⁾でありながら、わずか半頁しか紹介され

同郷の先覺
久野儀平君
同郷の先輩として衆人の信頼を受けた久野君は又晩
市古參の一人でもあつた。和歌山縣日高郡の出身、
性來義侠心強く、高橋金助氏と相並んで俱に旅館業
を營み、日本よりの新渡航者には最も懇切を以て接
した。明治廿五年の頃己に先輩として尊敬せられ、
龍勢領事時代には、同胞の催にかゝる天長節祝賀を
自宅に開いて一大盛宴を張り領事も亦禮装のまゝ臨
席せられたといふ。龍勢領事の意見で、其時迄に在
留民の祝賀がなかつたのを此上も無い遺憾たとして
此の家に在留民を招いて、始めて之を催した。參會
者は僅か廿名に過ぎなかつたが、盛會であつた。參會
者には僅か廿名の記念である。其後歸朝して、病の爲
に斃れたが、幸にも弟千代次君令兄の名を辱めず、
英語を善くして、在留同胞の爲、多大の便宜を興へ
た。現今は歸國して郷里で幾多事業に着手して居ら
るゝといふ。

資料1 『加奈陀同胞発展大観 付録』に 掲載された工野儀兵衛の紹介

『カナダ移民資料 第3巻』不二出版、1995、354頁より転載

ていないだけでなく、「久野儀平君」（下線は筆者）と誤記されているのである¹⁷⁾（資料1）。

先述した山本宣治も、この『加奈陀同胞発展大観 付録』には掲載されていない。これは、当時の日系社会における著名人、いわば成功者が大陸日報社に掲載料を支払ってでも宣伝のために当書への掲載を希望していたのであろう。そのため、美辞麗句を並べた自己満足的な喧伝までも散見される。すなわち、人名辞典をライフヒストリー研究に活用する場合、研究対象が限定されると同時に、誇大な表現に細心の注意が必要となる。

2. インフォーマントの属性と選定

ほとんどの場合、研究者自身によってインフォーマントへのインタビューが行なわれ、ライフヒストリーが描かれる。しかし、研究テーマとインフォーマントの類型化、ならびにその実証性について、日系カナダ移民史研究では詳細な検討がなされてこなかった。とくに生業に関わる研究の場合、インフォーマントの選定は大きな意味を持つ。そこで、この課題について論じてみよう。

本人の場合

ライフヒストリー法から生業に焦点を当てる際、通常ではインフォーマントが研究対象となる。生業に関わる場合、いわゆる現役として直接的に携わっている場合と、引退してからの記憶を呼び起こす場合とに分けられる。前者では、参与観察をとめない、生業の現場でインタビューを行なうなど、より実証的なオーラルデータを採集することも可能である。一方、後者では当時の記憶を呼び戻す「装置」の併用が望まれる。その代表的なものは日記であり、日時の記された帳簿類やメモ類などの文字データは、オーラルデータを相互補完的に実証するのに有効である。後述するように古写真については、より具体的に生業を描写しているため、「装置」として重要なだけでなく研究テーマにもなりえる¹⁸⁾。生業研究だけでなく、記憶の曖昧な幼少期のオーラルデータを採集する場合にも、古写真の併用は効果的であろう。

配偶者の場合

ライフヒストリーを描くにあたって、研究対象がインフォーマント本人でないこともある。この場合、性差によって生業への関わりかたが大きく異なる。和歌山県出身者をはじめ、日系カナダ移民が多く携わった漁業と水産加工業では、この傾向が著しい。第二次世界大戦以前、男性は刺網漁業によるサケの漁獲に携わり、女性がキャナリー（Cannery）と呼ばれる缶詰工場に従事したことが多い。つまり、詳細な漁撈技術については男性、缶詰の製造過程では女性がインフォーマントになることが、データの採集においてより適切なのである。なお、伐木業や製材業でも同様に、生業と性差の問題が生じる。しかし、これらの生業に比べて農業や商業では、性差の問題が生じることは比較的少ない。

したがって、本人の死去によって、インタビューができない場合、かかる点に留意しなければならない。にもかかわらず、最も近親者であったという理由だけで安易に配偶者からオーラルデータを収集することは、戒めて検討しなければならない。

血縁関係者の場合

配偶者と同様、まずは性差、そして直系・傍系の区別をすることが肝要である。また、同居の有無やその期間についても、データの多寡や実証性に差が生じる。インタビューを進めつつ、ファミリーツリー（家系樹）を作成すると、これらの情報が整理されやすい。とくに、世代間における情報の伝達や、意識の差異などを把握する場合、ファミリーツリーの活用は有効である。

ただし、これまでの日系カナダ移民史研究で論じられてきた世代差による意識の変化については、議論の再考が待たれる。この場合、世代が明示されるファミリーツリーの表現とその援用が、安易な世代論を助長してきた可能性もあろう。

地縁関係者の場合

いわゆる同郷者からのオーラルデータが、テーマによっては配偶者や血縁関係者よりも実証性の高い興味深いものになることが少なくない。日系カナダ移民の場合、生業と出身地との間に一定の関係がみとめられるため、テーマに直結するインフォーマントが不在の場合、地縁関係者からのインタビューは重要である。ただし、出身地の空間スケールについて十分に考慮されねばならない。これまで地理学的なアプローチが充分でなかったためか、かかる視点については議論の余地がある¹⁹⁾。すなわち、同一の都道府県出身者を、一概に同郷者とするものの危険性が指摘される。出身地のスケールをめぐる問題の等閑視は、これまで日系カナダ移民史研究に活用されてきた資料の多くでは、出身地が都道府県単位で記載されていたことに依拠しよう。しかし、例外的に大字単位まで記載されている資料²⁰⁾があるにもかかわらず、複数の資料との併用がなく、地理学的視点からの分析が不十分であったのである²¹⁾。

なお、カナダ日系漁民の最大の輩出地である和歌山県三尾出身者の多くは、彼らの子息がカナダで生誕した場合でも、小学校入学時には帰郷させ、祖父母のもとで日本語での教育を受けさせていた。このような教育の慣習は、日系カナダ移民史研究をめぐるライフヒストリー法において重大な問題点を包含していることは、本稿で後述したい。

同業者の場合

カナダだけに限らず、移民史研究においては、血縁・地縁関係者による連鎖移住の視点から説明されることが多い。したがって、同業者集団が血縁・地縁関係者を中心に成立する事例もある。ただし、連鎖移住によらないインフォーマントを見逃すことは、この集団の重要な形成要素を見落とす危険性をはらんでいる。とりわけ、ライフヒストリー法から生業をとらえる場合、例外的な事実が導かれることも少なくない。これには、血縁・地縁関係者によって醸しだされる、いわゆる英雄的な語りを排除する働きもある。さまざまな同業者集団のキーパーソンの属性を考慮しつつも、彼らのオーラルデータから貴重な情報が提供されるからである²²⁾。

3．ライフヒストリーの作成とその限界

三尾出身者の特徴

それでは、バンクーバー在住の田並謙治氏をインフォーマントとしたライフヒストリーの作成過程を説明する。その場合、生業との関わりに焦点を当て、前述したインフォーマントの属性と実証性、そして記憶を呼び戻す「装置」の効果について検討を加えたい（表1・図1）。

和歌山県三尾出身の帰加二世である田並氏は、1924年（大正13）にスティーブストン（図2）で、父・兼次郎と母・アイの長男として生まれた。1884年（明治17）に三尾で生まれた兼次郎は、1917年（大正6）に1896年（明治29）生まれのアイと結婚した。1910年（明治43）頃、兼次郎はスティーブストンへ渡航し、サケ漁業に従事した。しかし、単独での渡航か呼び寄せか、後者ならば血縁あるいは地縁関係者によるものか、などの情報を長男の田並氏は持ち合わせていない。『須知武士道漁者慈善団体 三十五年史』²³⁾によれば、1935年（昭和10）頃、兼次郎氏はリッチモンド・キャナリーに従事していたが、その名称を田並氏は知らなかった。また、6月から10月にかけてのサケ漁期以外では、兼次郎は製材所や鉄道工事現場でも働いたらしい。彼がバンクーバー近海でエビ網漁業を試みたり、カナダ西北部のクイーン・シャーロット諸島へ鯨油採取を目的とする捕鯨業にも携わったりしたことについての詳細も不明である。つまり、いくつかの資料を提示しながら実施したインタビューにおいても、田並氏のオーラルデータからは、父・兼次郎のライフヒストリーは描けなかったのである²⁴⁾。

ところで1920年代初期、バンクーバー島西岸において和歌山県出身者を中心としたおよそ100世帯が新たに漁村を開拓した際、兼次郎は先駆者のひとりであった。にもかかわらず、田並氏には父親からの口承は必ずしも多くない。漁業ライセンスの削減政策²⁵⁾と動力船の開発²⁶⁾、そして漁場の発見を契機とした集団移住による漁村の開拓²⁷⁾は、カナダ漁業史においても極めて重要な史実でありながら、田並氏からはオーラルデータが発信されない。この理由として、集団移住後に田並氏がスティーブストンで生まれたことが指摘される。それだけでなく、田並氏が具体的な記憶を有さないことは、先述した三尾出身者の教育慣習に求められる。1933年（昭和8）、三尾尋常小学校へ入学するため氏は、母親と弟妹とともに帰国した。つまり、日系カナダ移民史、とくに漁業に関して絶対的多数を占める三尾出身者を安易にインフォーマントに設定する危惧がここにある²⁸⁾。二世は学齢期を日本で過ごすため、同期についてはカナダでのライフヒストリーが存在しないのである。また、幼少期ゆえに不正確さはあるものの、好奇心旺盛なため記憶が鮮明に残る同期については、体験に基づくオーラルデータが欠落するのである。

一世から二世への過渡期にあたる1920年～40年代、カナダ日系漁民には漁業ライセンスの削減問題が襲い掛かったにもかかわらず、現在では同期を知る一世はほとんど健在しない。その場合、二世のオーラルデータを得るにあたって、三尾出身者にインタビュー調査をする危険性を、これまでカナダ移民史研究者は見落としていたのである。

地縁・血縁関係者の記憶

1930年（昭和5）、三尾尋常小学校入学のため帰国した田並氏は、同校を卒業後、三尾尋常高

表1 田並謙治氏のライフヒストリー

年	事 項
1924 (大正13)	スティーブストンにて田並兼次郎(明治17年生)・アイ(明治29年生)の長男として生誕
1930 (昭和5)	三尾尋常小学校へ入学のため, 帰国
1933 (昭和8)	弟の入学のため, 母, 弟妹たちが帰国 父・兼次郎は3月下旬~10月下旬のみユクルーレットへ出稼ぎ
1936 (昭和11)	三尾尋常高等科進学, 1年後退学
1937 (昭和12)	常磐商業学校(日高郡和田村)入学, 昭和15年卒業
1940 (昭和15)	東京日本橋の食料品卸売商・廣屋商店に勤務 父・兼次郎, 国勢を鑑み, ユクルーレット開拓者の上山又吉と帰国
1943 (昭和18)	日本郵船・船舶運営会(能代丸)に調理補助(皿洗い)として乗船
1944 (昭和19)	11月1日, 和歌山第61連隊, その後に大阪西部第37部隊へ入隊
1945 (昭和20)	内モンゴルの張家口で終戦, 北京経由で翌年5月25日に博多へ帰国
1947 (昭和22)	三尾漁業組合(旧組合)に事務員として勤務
1951 (昭和26)	寺西誠子(昭和5年・ポータルパーニ生)と婚姻 誠子は多くの三尾出身の女性とともに, 堺市浜寺の進駐軍にメイドとして勤務後, 単身で渡加, 血縁関係の子守として, キャンビー街25thへ
1953 (昭和28)	入隊時の上官の紹介で, 大阪市高麗橋の金網会社・協和金網へ勤務
1954 (昭和29)	10月, 渡加 キャンビー街25thへ転居 日加二重国籍者の入国審査は容易であったが, 兵役経験者は困難であったので, 妻からの呼び寄せとなり入国が許可 メイン街北端にある西繁太郎のスジコ工場に勤務 12月, ラーチ街35thにあるユダヤ系2階でハウスボーイとして住み込み労働 誠子の英語学校の友人(宮城県出身)の後任
1955 (昭和30)	和歌山県御坊出身者の庭園業者(日系ガーディナー協会6代目会長)へ勤務 フレーザー街38thのイギリス系宅へ転居 当時, 1日の生活費が1ドル, ガーディナーの時給1ドル
1956 (昭和31)	前掲の庭園業者から独立した和歌山県日置出身の庭園業者へ勤務 キャンビー街5th日系二世(静岡県出身)から食品・雑貨店の購入・開業 長女の誕生 多くの三尾出身の独身帰化二世の世話をする
1958 (昭和33)	オーク街22ndへ転居し, ドイツ系から食品・雑貨店を購入 前掲の庭園業者から友人(和歌山県和田出身)と独立し, 共同経営 1959年のバンクーバー日系ガーディナー協会設立の呼びかけ案内が届くも入会せず
1959 (昭和34)	花粉症のため, 日系人対象の人事担当者(長野県出身)の紹介によりCANFISCOへ勤務
1960 (昭和34)	長男誕生
1969 (昭和39)	食品・雑貨店だけでなく, 同居するオフィス・精肉店も含めたビルを買収
1975 (昭和50)	ソフィア41stへ転居, オーク街22ndのビルは韓国系へ売却
1989 (平成1)	CANFISCOを退職

数字は, 図3に対応する

聞き書き取り調査により作成

日系カナダ移民のライフヒストリーをめぐる調査法の再考（河原）

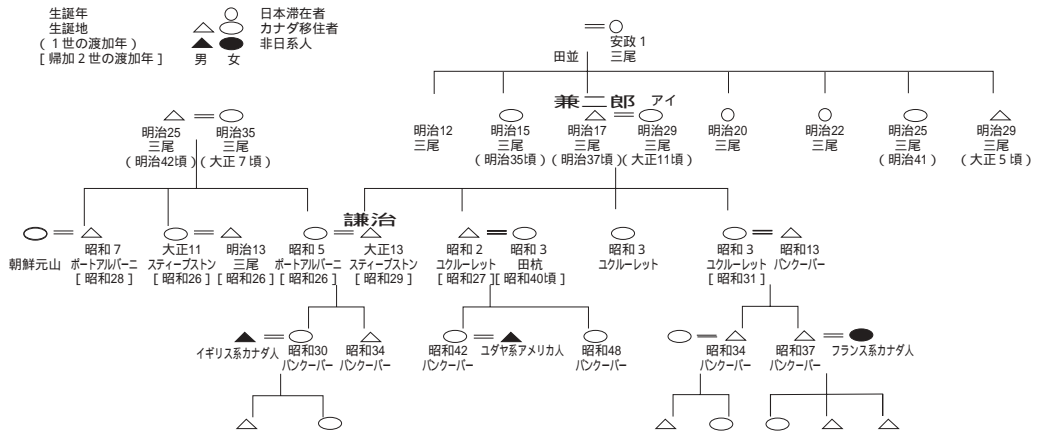


図 1 和歌山県三尾出身・田並家のファミリー - ツリ -

聞き取り調査より作成



図 2 カナダ西岸における田並家に関する地域

表2 昭和10年度(昭和11年3月)三尾小学校卒業生(大正12年度生まれ)の生誕地と戦後の居住地

No.	性	氏名	生誕地	戦後の居住地
1	男	I . Y	カナダ・スティーブストン	日本
2	男	U . A	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
3	男	K . S	三尾	日本・三尾
4	男	K . T	カナダ・スティーブストン	カナダ・バンクーバー
5	男	K . N	カナダ・スティーブストン	カナダ・トロント
6	男	T . Y	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
7	男	田並謙治	カナダ・スティーブストン	カナダ・バンクーバー
8	男	T . U	三尾	日本
9	男	T . T	(不明)	(戦死)
10	男	T . T	カナダ・スティーブストン	カナダ・バンクーバー
11	男	N . K	カナダ・タコマ	日本・三尾
12	男	N . K	カナダ・スティーブストン	日本・御坊
13	男	H . S	カナダ・スティーブストン	カナダ・レバストック
14	男	H . J	三尾	(戦死)
15	男	H . R	三尾	(戦死)
16	男	F . K	三尾	(戦前に死亡)
17	男	Y . S	カナダ・スティーブストン	日本
18	男	Y . K	三尾	日本・三尾
19	女	I . T	三尾	日本
20	女	U . K	カナダ・スティーブストン	日本
21	女	U . M	カナダ・スティーブストン	日本
22	女	K . T	カナダ・スティーブストン	カナダ・バンクーバー
23	女	K . Y	アメリカ・ロサンゼルス	アメリカ・ロサンゼルス
24	女	K . C	(不明)	日本
25	女	S . S	カナダ・スティーブストン	日本
26	女	T . M	三尾	日本・三尾
27	女	T . F	三尾	日本・三尾
28	女	T . J	(不明)	日本
29	女	T . C	(不明)	日本
30	女	N . T	カナダ・スティーブストン	(戦前に死亡)
31	女	N . T	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
32	女	N . M	カナダ・スティーブストン	日本
33	女	H . M	カナダ・タコマ	カナダ・タコマ
34	女	H . S	三尾	日本・三尾
35	女	H . K	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
36	女	H . S	(不明)	日本
37	女	M . H	三尾	日本・御坊
38	女	M . M	カナダ・スティーブストン	日本
39	女	M . T	カナダ・スティーブストン	日本
40	女	M . K	三尾	日本・三尾
41	女	Y . T	三尾	(戦前に死亡)
42	女	Y . K	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
43	女	Y . T	カナダ・スティーブストン	日本・三尾
44	女	Y . H	(不明)	日本

注：No.4・5・13・23は、第二次世界大戦中もカナダ滞在三尾小学校開校百年祭実行委員会編集部編『三尾小学校開校百年史』、和歌山県日高郡美浜町立三尾小学校、1977、93頁。ならびに聞き取り調査より作成

等学校を経て、近隣の常盤商業学校に進学した（表1）。その後、1940年（昭和15）に東京・日本橋にある食料品卸売商に勤務した氏は、やがて1943年（昭和18）に日本郵船船舶運営会の運営する外航船に調理補助として乗船した。しかし、翌年の11月に陸軍に徴集された氏は、終戦を内モンゴルで迎えた。

帰還後、田並氏は三尾漁業組合に事務員として勤め、1953年（昭和28）には大阪市の金網会社に勤務したが、諸般の事情からカナダへ戻る決心をした。1949年（昭和24）当時、カナダ国籍の所有者はカナダへの入国が許されていた。しかし、氏のように日本の兵役経験者にはその審査が厳しかった。そこで、1951年（昭和26）に結婚していた妻²⁹⁾の呼び寄せとして、氏は再びカナダへ戻ったのである。

田並氏のように、戦前にカナダで生まれてカナダ国籍も有していた日本人が、戦後にはカナダへ戻るケースが多い。いわゆる帰加二世は、戦後しばらくの間、困窮生活を送らざるをえなかった三尾出身者に多かった。田並氏の出身校である三尾尋常小学校の同級生について、生誕地と戦後の居住地をまとめると、女性に比べて男性のほうが新天地での活躍を求めてカナダやアメリカに帰還する傾向が読み取れよう（表2）。ただし、同じような体験をすることの多い地縁関係者とはいえ、彼らのライフヒストリーを描くには、やはり限界がある。表2については、オーラルデータだけで比較的正確な情報を採集できたわけではない。田並氏とのインタビューでは、『三尾小学校百年史』に掲載された名簿・写真を見ながら実施された。つまり、これらの資料が氏の記憶を呼び起こす「装置」の役割を果たしたのである。

4. 技術の記憶

居住地の移動

1954年（昭和29）10月、カナダへ移住した田並氏はキャンビー25番街に住み、妻の近親者が経営する水産加工会社・西繁太助工場に勤務した（図3）。12月、氏はラーチ35番街にあったユダヤ系住民の2階に住み込み、家事手伝いをするようになった。この仕事は、妻の友人である宮城県出身者からの紹介によるものであった。当時、同地周辺に集住していたユダヤ系住民には、親日家が多かったという。

1955年（昭和30）年、田並氏は、和歌山県御坊出身者の経営する庭園業者に従事するとともに、フレザー38番街に転居した。1日の生活費が約1カナダドルであった当時、ガーディナーと称される庭園業者の時給も1カナダドルであったという。このように、比較的高給であるにも関わらず、当時では必ずしも高次な技術を必要としなかったこの生業に、多くの帰加二世が従事するようになった。1950年（昭和25）に移住した氏の実弟もまた、例外ではなかった³⁰⁾。

1956年（昭和31）、前述した和歌山県出身者から独立した同業者とともに、田並氏は庭園業の共同経営を始めた。また、長女の生誕を契機に氏はキャンビー5番街へ転居し、静岡県出身者より食品・雑貨店の経営権を取得し、開業した³¹⁾。当時、新たな帰加二世の移住が多く、戦前のカナダ日本人社会を知る田並氏夫妻を懇意にする和歌山県出身者、とくに地縁関係者である三尾出身者は多かった。

1958年（昭和33）、田並氏はオーク22番街へ転居し、より大きな食品・雑貨店をドイツ系住

民から購入した。そのころ、三尾の隣村の和田村出身者と共同で、氏はガーディナーとして独立した³²⁾。その後、いわゆる花粉症であることを知った氏は庭園業を継続することを断念し、カナダ最大手の水産加工業社である Canadian Fishing Company (以下 CANFISCO) に勤めた。就業の契機は、日系人の就職斡旋業を担当していた長野県出身の二世の紹介によるものであった。この担当者の実父が、すでに戦前から同社に勤務していたのである。そして、1975年(昭和50)に食品・雑貨店だけでなく、入居する全店舗をも購入していたビル全体を韓国系住民へ売却した³³⁾。田並氏は、やがてソフィア41番街に現在の自宅を建築した。

ところで、1954年(昭和29)にカナダ入国後、田並氏の居住暦を地図化すると、興味深い事実がわかる(図3)。19世紀末、バンクーバーでの日系人集住地区は、製材工場が連立する港湾地区の後背地にあたるパウエル街であった。やがて、製材工場やセメント工場の集中するフレイザー・クリーク南岸のキツラノ地区、ならびにフェアビュー地区にも日系人街が形成

されるようになった。パウエル街には、日系人を顧客とする日系商店やゲストルームが軒を連ねていたが、後者の両地区には、それらの経営者の住居もあった。しかし、太平洋戦争の勃発によって、日系人の多くは、カナダ西岸のブリティッシュ・コロンビア州(以下BC州)を追われ、これらの集住地区も崩壊した。しかし、戦後にBC州への帰還が許された日系人は、必ずしもこれらの地区へ居住しなかった。彼らが移動したあと、パウエル街はスラム街と化し、キツラノ・フェアビュー地区も倉庫街となり、これらの地区は必ずしも二世や帰加二世、とくに1962年(昭和37)に入国を許可された新移住者にとっては、快適な居住環境ではなかった。そして、戦時中の排日をめぐる苦い体験から、日系人自らも集住を避けたという³⁴⁾。田並氏もまた、郊外のカナディアン邸宅を自動車で廻るガーディナーに従事するならば、都心部に居住する利点はなかった³⁵⁾。後にCANFISCOに勤務するにあたって、自家用車での通勤が可能であるかぎり、近隣とはいえパウエル街周辺に居住する必然性はもはやなかったのである。

水産加工業にみる技術伝播

1959年(昭和34)、田並氏はCANFISCOという大手の水産加工会社に就職した。そこで、氏のライフストーリーのなかから、生業に関することを詳細に取り上げる。その場合、記憶を呼び起こすいくつかの「装置」の果たした役割が大きい。そこからは、カナダ日系漁民をめぐる



図3 田並謙治氏の居住歴

聞き取り調査より作成

基図

1 : 50,000 North Vancouver, 1986

1 : 50,000 Lulu Island, 1972

技術伝播が伺われるからである。

写真 1 は、1966 年（昭和 41）の夏季に BC 州沿岸各地で獲られたさまざまなサケ類が、CANFISCO に水揚げされる様子である。運搬船から魚類を降ろす際、担当者は頭部と尾びれの形状からサケの種類を選別し、胴体を傷つけないよう約 1m のピュー（突棒）で頭部を突き刺して荷台へ移す。サケのなかでもサカイ種はキャナリー（缶詰工場）へ送られ、缶詰加工には適さないチャム種とコーホー種は、シェッド（解体場）へ運ばれる。鮮度を保ったまま魚類を加工作業に回すため、迅速な行動が要求される。そのため、勤勉であるといわれるだけでなく、戦前から漁業に従事していたことから、瞬時的確な魚類の選別が可能であった日系人が、この作業を任されていた。そのなかでも、5 年以上勤務している熟練者がこの作業にあたったのである。ただし、1960 年代後半～70 年代前半になると、一連の作業はエレベータを活用した魚網やバキューム・ホースによる方法へと転換された。また、すでに漁場で冷凍されたものが入荷することも多くなり、やがて熟練の日系人による選別作業は姿を消したのである。

工場 1 階に設置されたシェッド（解体場）へ運ばれたサケは、6 人 1 組からなる流れ作業で解体されていく（写真 2）。まず 1 人目がサケの肛門から小型ナイフの刃を入れ、エラ元まで腹を切り開く。次に 2 人目ならびに 3 人目が、大型ナイフでサケの頭を切り落とす。ただし、日本向けの輸出用のサケの場合、美観上からわずかにアゴの皮を残して頭部を取り除かねばならない。彼らには、この「プリンスカット」と呼ばれる技術が求められる。したがって、サケの体内構造を熟知している漁業経験者、とくに熟練者がこの作業を担当するのである。これが終わると、4 人目は内臓を取り除きやすくするため、小型ナイフで胸部を開く。5 人目は手で内臓を引き出したり、スプーンで血合部分を掻き出したりする。そして、最後の 6 人目はサケの血液を洗い流し、傷の有無や鮮度を基準にフィレット（切身）で出荷できないものをキャナリ



写真 1 . サケの選別作業・Picking（田並謙二氏所蔵）

撮影年：1966 年夏，CANFISCO 岸壁にて

左より 田並謙二氏（42 歳）
和歌山県三尾村出身・日系帰加二世（36 歳）：通常は魚洗浄を担う
和歌山県比井崎村阿尾出身・日系帰加二世（30 歳）：通常は魚洗浄を担う



写真2．サケの解体作業：その1（田並謙二氏所蔵）

1971年10月頃，CANFISCO 1階のシェッドにて

- 左より 鹿児島県出身・日系一世（61歳？）
和歌山県三尾村出身・日系帰加二世（51歳）
田並謙二氏（47歳）
イタリア系（55歳）
滋賀県出身・日系三世（22歳）
滋賀県出身・日系一世（58歳）



写真3．サケの解体作業：その2（田並謙二氏所蔵）

1988年9月24日，CANFISCO 1階のシェッドにて

- 左より ノルウェイ系二世（22歳）
ギリシア系二世（23歳）
田並謙二氏（64歳）
和歌山県三尾出身・日系三世（30歳？）
中国系（40歳代）：フェレットからのヘルパー，
通常，女性はシェッドで勤務しない
不明（非日系）：20歳代？

表3 CANFISCOにおける水産加工業の従事者（1989年）

作 業	民 族	日 本	中 国	ヨーロツパ	その他	合計
解体（シェド）		9 - 0	0 - 1	4 - 0	0 - 0	13 - 1
切身（フェレット）		0 - 0	0 - 1	0 - 4	0 - 1	0 - 6
缶詰（キャナリー）		0 - 3	0 - 6	1 - 4	0 - 1	1 - 14
冷蔵（コール）		0 - 0	0 - 0	3 - 0	0 - 0	3 - 0
機械（エンジン）		0 - 0	0 - 0	5 - 0	0 - 0	5 - 0
事務（オフィス）		2 - 0	0 - 0	0 - 0	0 - 0	2 - 0
合計		11 - 3	0 - 8	13 - 8	0 - 2	24 - 21

左：男性（人） 右：女性（人）

1 階・Cannery（缶詰工場）

約40人×3ライン，ただし日によって異なる
 サカイ種を中心とするサケの身を洗う
 小型は中国系女性，大型は中国系男性
 パッキングは日系女性，塩振りなどその他は機械化
 経験・ナイフ技術を取得すると，多忙時にはフィレットルームに移動する

1 階・Cool Storage（冷蔵室）

約20～30人のヨーロッパ系男性
 仕事としては比較的楽な在庫管理
 サケ類（サカイ・コーホー・スプリング・チャム種）をそのまま冷凍保存
 電動のこぎりで生産調整

2 階・Fillet Room（切身作業場）

約30～40人の女性
 おもにハラバット（おひょう），タラなどの白身魚を扱う
 納品のとき漁民が頭を落とした後，エレベーターで2階に上げる
 その後，男性が作業テーブルまで運搬し，女性が裁断，木箱への氷結に冷凍室へ
 鮮魚のまま，アメリカ東海岸へ貨車輸送

1989年4月24日，田並氏のRetirement Dinner 出席者95人のうち判明者のみ

一へ送るのである。

このような一連の作業は，1971年（昭和46）と1988年（昭和63）でも大差はない（写真2・3）。しかし，10年後の後者の写真においても前述した「プリンスカット」については，高次な技術だけでなく，美観を重視することを理解できる日系人が担っている。つまり，写真2・3の両方において作業順の3番目に写っている田並氏は，極めて優秀な職人であったことがわかる。さらに，田並氏を挟んで左側にギリシア系，右側には日系三世の若輩者が並んでいる写真3は，水産加工業界から日系人が少なくなってきた事実を写している。それだけでなく，「プリンスカット」に関わる作業だけは，今でも日系人の有する伝統的な技術に委ねられていたことを示すのである。

これに類似するケースとして，チャム種からスジコを取り出す作業がある。戦前，魚卵を食す習慣がほとんどなかったカナダでは，解体（シェッド）部門においてスジコを丁寧に扱う技術が理解されていなかった。そこで，日本への輸出向けにスジコを整然と箱詰めする作業は，「プリンスカット」と同様に日系人，とくに女性が担っているのである。

このように，水産加工業における技術と民族性との関係は，会社組織としての配属にまで現

れる(表3)。詳述したように、解体(シェッド)部門にはサケ類の構造を熟知している日系人の男性が多い。19世紀末に日系人が従事する以前、キャナリーで缶詰作業に従事していた多くは中国系であった³⁶⁾。そのため、現在でもキャナリー部門には中国系女性が多い。対して、ヨーロッパ系住民では、男性が解体・冷凍・機械部門、女性が切身・缶詰部門を任うのである。

ところで、これらのデータは田並氏からのインタビューによるものである。このとき、1989年(平成元)4月24日に催された氏のリタイアメント(定年退職)パーティのメッセージカード³⁷⁾を見ながら調査を実施した。いわゆる芳名録が、先述した古写真と同様に氏の記憶を呼び起こす「装置」の役割を果たしたのである。この過程がなければ、水産加工業が民族的かつ重層的に成立していることを実証することは、困難であったと思われる³⁸⁾。

おわりに ライフヒストリー研究の限界と可能性

日系カナダ移民を対象とするだけでなく、ライフヒストリー研究においてはインフォーマント本人が死去すると、当人からオーラルデータを収集することは不可能である。また、本稿で検討したように配偶者、血縁・地縁関係者や同業者などから間接的にライフヒストリーを描くには問題点が多い。そして、ライフヒストリー研究の限界は、本人ならびに関係者の死去によって訪れると考えがちである。このように、ある意味では常識的な研究視点についても再検討し、本稿のむすびとしたい。

個人情報及時系列的に記録されているデータがあれば、本人が死去した場合であっても、ライフヒストリーの一部を復原することは可能であろう。たとえば、BC州において毎年刊行される*BC Directory*と総称される名簿には、大都市では街路毎に居住者、アルファベット順に居住者の職業が記されている。その他の集落では、アルファベット順に居住者と住所が並べられている。この資料を活用すると、特定個人の居住暦とその生業の一部を把握することが可能なのである。

そこで、この資料を利用した大阪府泉南郡北中通村出身のM.Kのライフヒストリーの一部は次のように復原される。1907年(明治40)の移住当初、M.Kはバンクーバー郊外のキャナリーに従事していたが、その後はフェアビュー地区での雑貨店を手始めに菓子製造業、精米業や下宿業を営んでいた。やがて、彼はパウエル街において鮮魚店を営むようになった(図2)。この頃には、三男と思われるM.Eが経営主となり、プリティッシュ・コロンビア大学を卒業した娘のM.Hが経理を担当していたようである。なお、M.KとM.Eについては、BC州バーナビーにあるNational Nikkei Museum & Heritage Centre所蔵の資料³⁹⁾から、移住以前の日本での居住地が判明している。それを利用すれば、日本の地籍資料を通じて、移住時の彼らの土地所有状況を知ることにも可能である⁴⁰⁾。

本稿では、日系カナダ移民史研究において、ライフヒストリー法から生業を再検討することを試みた。その場合、資料の併用の有無によって、実証性の展開と深化が大きく異なることに留意した。さまざまな資料は、インフォーマントの記憶を呼び戻すための「装置」となるのである。公的な資料だけでなく、むしろ古写真や日記のような私的なもののほうが、「装置」の効果は高いようである。また、インフォーマントに関わる名簿類は、「装置」以上に、有効なデー

タになりうる。さらに、*BC Director*のような個人情報の時系列的に把握できるデータは、インフォーマントの記憶を呼び起こす「装置」の域を超え、故人のライフヒストリーの一部を復原できる可能性を秘めている。

以上の諸点を鑑みると、インフォーマントの死去によってオーラルデータが消え、それを採集できないことがライフヒストリー法を採る個人史研究の終焉ではないようである。「装置」となる併用資料、とりわけ時系列的な個人データが発見されない場合、あるいはプライバシーの問題などによって、それらが利用できないときこそが、この種の研究の限界ではないかと提案したい。

付記

本稿は、筆者が2001年度にカナダ・ブリティッシュコロンビア大学日本研究センター客員研究員として在籍時（2001年度立命館大学学外研究A）に開始した調査に基づくものです。それ以降、筆者の日系カナダ移民史研究に多大なご高配を賜り、本稿のインフォーマントをお引き受けいただいた元・BC州和歌山県人会会長の田並謙二様（バンクーバー在住）と、そのご家族の皆様にお礼申し上げます。山本宣治のカナダ滞在時に関しては、佐々木敏二先生にご教示いただきました。そして、カナダでの調査でお世話になった全ての方々、資料整理についてご協力いただいた立命館大学大学院文学研究科地理学専攻の近藤暁夫・南 紀史君と同文学部地理学専攻の村上富美さんにお礼申し上げます。

本稿を作成するにあたり、平成15・16・17年度科学研究費補助金・基盤研究C「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系漁民の拡散構造に関する歴史地理学的研究（研究代表者：河原典史）」の一部を使用しました。本稿の内容については、立命館大学国際言語文化研究所・日系文化研究会2003年度第3回例会（2003年7月、立命館大学）、京都民俗学会第23回年次大会（2004年12月、京都市学校博物館）において発表しました。会場で有益なご助言をいただいた、さまざまな研究分野の先生方にお礼申し上げます。

末筆ではございますが、長年にわたって立命館大学国際言語文化研究所・日系文化研究会の代表をお勤めくださり、筆者の拙い研究について暖かくご指導下さいました立命館大学法学部名誉教授の山本岩夫先生に心からお礼申し上げます。

注

- 1) これらの多くは、佐々木敏二・権並恒治編集・解説『カナダ移民史資料』全11巻、不二出版、1995・2000。に収録されている。
- 2) 1907年6月から1941年2月まで発行された『大陸日報』は当時の日系カナダ社会を映す貴重な資料である。詳しくは、新保 満他『カナダの日本語新聞』、PMC出版、1991、1-288頁。
- 3) 代表的なものとして、Canada, *Sessional Paper*, no.54, "Report of the Royal Commission on Chinese and Japanese Immigration," 1902, pp. 34-359.
- 4) 研究の視点は、パイオニアへの賛美、厳しい生活条件のなかでの出稼ぎ・移住や、マイノリティーであった日系人に対する排斥の実態に置かれていた。しかし、それらは1988年のリドレス運動を契機に変化をきたした。そして、戦前における日系人の生活実態に関して再考する必要性が説かれ、日系カナダ移民史をめぐる発展的な研究の段階を迎えようとしている。なお、日系カナダ研究史に関する私見は、拙稿「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開 和歌山県出身の船大工のライフヒストリーから」、立命館言語文化研究17-1、2005、59-74頁。を参照されたい。

- 5) 大正・昭和初期の生物学者・社会運動家であった山本宣治(1889-1929)は、1907年(明治40)から1911年(明治44)にカナダに滞在し、庭園業やサケ漁業に従事しながら、『加奈陀新報』などいくつかの論考を投稿している。詳細は 佐々木敏二『山本宣治(上)・(下)』,不二出版,1998,1-368・1-412頁。
- 6) 山本宣治著,佐々木敏二・小田切明徳編『山本宣治全集 第六巻 日記・書簡編』,汐文社,1979,218-417頁。
- 7) 前掲6),225頁
- 8) 前掲6),252頁
- 9) 前掲6),264頁
- 10) 前掲6),268頁
- 11) 筆者は「バンクーバーにおける日系ガーディナーの展開 日系漁民の転業をめぐる考察から」,日本地理学会2003年度春季学術大会・移住とエスニシティー研究グループ(2003年3月・東京大学)を口頭発表した。その内容については,別稿を準備中である。
- 12) 中山訊四郎『加奈陀同胞発展大観 付録』,1922,36-554頁(『カナダ移民史資料 第2巻』,不二出版,1995,72-590頁)。
- 13) 前掲12),553-574頁(『カナダ移民資料 第3巻』,不二出版,1995,591-612頁)。
- 14) 前掲12),314-349頁(『カナダ移民資料 第3巻』,不二出版,1995,314-349頁)。
- 15) 前掲12),350-382頁(『カナダ移民資料 第3巻』,不二出版,1995,350-382頁)。
- 16) 西浜久計「カナダ移民の父 工野儀兵衛」,みはまの歴史4,1994,1-49頁。工野の遠縁にあたる西浜は,工野の三度加に関する先行研究を詳細に再検討している。
- 17) 前掲12)354頁(『カナダ移民資料 第3巻』,不二出版,1995,354頁)。
- 18) 近年,古写真から当時の生活を読み取る研究が注目されている。例えば,京都映像資料研究会編『古写真で語る京都 映像資料の可能性』,淡交社,2004,1-278頁。
- 19) 佐々木敏二『日本人カナダ移民史』,不二出版,1999,78-82頁。なお現在でも,和歌山県出身者には「江州ソーミル,熊本ヤマ,死ぬよりましかなヘレン獲り」という口承がある。これは,滋賀県出身者は製材業,熊本県出身者は伐木業,和歌山県出身者はニシン(サケ)漁業に多く従事していたことを指している。ただし,生業と出身者との関係を都道府県単位でとらえる危険性については前掲4)を参照されたい。なお,ニシン漁業に関しては,拙稿「第二次大戦以前のカナダ西岸における日本人による塩ニシン製造業 バンクーバー島東岸のナナイモを中心に」,地域漁業学第45回大会報告要旨集,2003,28頁を参照されたい。
- 20) 前掲12),1-273・383-655頁(『カナダ移民資料 第3巻』,不二出版,1995,1-273・383-655頁)。
- 21) 筆者はこの視点から日系カナダ移民の輩出地と生業の関係を再検討している。バンクーバー島東海岸の漁業開拓については,以下の拙稿を参照されたい。拙稿「太平洋戦争以前のカナダ西岸における日系漁民の拡散構造 バンクーバー島西岸のユクルレットを中心に」,歴史地理学44-4,2002,52頁(発表要旨)。同「太平洋戦争以前のバンクーバー島西岸における日系漁民の移動と定着 クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に」,第27回年次研究大会プログラム・報告要旨,日本カナダ学会,2002,19-20頁。
- 22) 筆者は,バンクーバー日系ガーディナーズ協会で初代会長のライフヒストリーについて調査した。その場合,会長の叙勲パーティの様子を収めたビデオテープから会長の経歴紹介を聞き取るだけでなく,会長を知る協会のメンバーからのインタビュー調査を繰り返した。
- 23) 小林貞二『須知武士道漁者慈善団体 三十五年史』,1935,725頁(『カナダ移民資料 第4巻』,不二出版,1995,725頁)。

- 24) ライフヒストリーを作成するとき、第一義的にはインフォーマントの生年を確認するが、彼らは自分自身の生年月日を経験に基づいて記憶しているわけではない。当然のことではあるが、これは両親をはじめとする近親者から教示されるのである。したがって、インフォーマントの生誕を実証する場合、戸籍類の資料を参照するのがより正確であろう。しかし、ここまで実証性を追及すると、プライバシーの問題は避けて通れない。一方では、ライフヒストリーを描く場合、戸籍資料から看取できる情報も多い。戸籍資料には生誕地が記されるため、幼少期をすごしたユクルーレットではなく、田並氏はスティーブストンで生まれたことが判明した。つまり、戸籍資料が本人の直接知りえないライフヒストリーを描く「装置」としての役割を果たしたのである。
- 25) 飯野正子『日系カナダ人の歴史』、東京大学出版会、1997、109-118頁。 前掲19) 、93-102・124-128頁。 新保 満『カナダ移民排斥史 日本の漁業移民（新装版）』、未来社、1996、1-241頁。
Mitsuo Yesaki & Harold and Kathy Steves Steveston, *Cannery Row*, Lulu Island Printing Ltd., 1998, pp.1-90.
- 26) 前掲4)
- 27) 前掲21)
- 28) バンクーバー島西岸におけるユクルーレット・トフィーノ・バムフィールドへの漁業開拓と集団移住についての詳細なオーラルデータは、和歌山県東牟婁郡古座ならびに新宮町出身者から採集することができた。これらの出身者には、日本で初等教育を受けるという慣習はそれほど強くなかった。その結果、漁場を発見した先駆的な役割を果たしたのは三尾出身者であること、居住地については出身地による棲み分けがあったこと、ならびに漁業組合の設立・運営に直接関わったのは三尾出身者以外が多かったなどの興味深い史実が明らかになった。前掲21)。
- 29) 1930年（昭和5）、バンクーバー島中央部における陸上・海上交通の要地であるポータルバーニで生まれた彼女は、戦時中、家族とともに日本へ引き上げたものの、戦後には単身でバンクーバーへ戻り、血縁関係者の家事手伝いをしていた。
- 30) 二世・帰加二世に庭園業が多い事実は、山田千香子『日系カナダ社会の文化変容』、御茶ノ水書房、2000、146-152頁。などをはじめ、先行研究でも指摘されてきた。しかし、その要因については、ほとんど言及されてこなかった。ここにも安易な世代論と、軽視されてきた生業研究という問題点が包含されている。
- 31) 権利金も含め500カナダドルで譲与、当時パン1ポンドは17カナダセント、コーク1本は6カナダセントだったという。
- 32) 田並氏がガーディナーとして活躍していたとき、当家では雑貨店も経営し、おもに夫人がこれに当たっていた。それは、秋季から春季にかけてバンクーバーは雨季となり、庭園業からの収入の減少を補うためである。
- 33) 第二次世界大戦後のバンクーバーでは、雑貨店の経営はユダヤ系から日系、やがて韓国系へと譲渡されることが多い。漁業ライセンスも日系からベトナム系へと移動するケースが一般的である。庭園業についても、中国系 日系 インド系へと変化している。
- 34) 現在でもスティーブストンに居住する日系人は多いものの、戦前の規模とは言いがたい。
- 35) 戦前における庭園業者の居住地は、商工地区の縁辺部にあたるキツラノ地区ならびにフェアビュー地区、現在ではバーナビーをはじめとするバンクーバー郊外に多い。この理由は、芝刈りを中心とする庭園業から大型機材を必要とする造園業へと日系ガーディナーの生業が展開したためである。
- 36) Yesaki Mitsuo, Sakuya Nishimura and Duke Yesaki, *Salmon Canning on the Fraser River in the 1890s*, Fraser Journal Publishing, 2000, pp. 1-35.
- 37) リタイアメント・パーティにはCANFISCOに勤務するおよそ3分の1の社員が出席した。このなかには、繁忙期だけの季節的労働者は含まれていない。また、民族別の出席数の多寡はとくにない。

- 38) 著者は、バンクーバーのとある日系水産加工業者へ従業員リストの閲覧を依頼したことがある。しかし、多民族国家のカナダ社会では雇用において特定の民族的な条件が認められないため、年齢別・性別・民族別の内容が把握できるデータの閲覧を拒否された。
- 39) Andrey Kobayashi, *Issei Life History: An Interactive Date Base on Japanese-Canadian History*. Japanese-Canadian National Museum & Archives Society, 1992.
- 40) この資料を利用すると、M.Kの父親の名前が判明しただけでなく、彼らが渡加前に所有地を売却したことも判明した。筆者は、渡加後も含めた彼らを事例にした日系カナダ移民史に関する歴史地理学的報告を準備中である。